

# 明治開國以來の思想推移 に見る我が國民性

前司法次官 皆川 治 廣

明治の時代——明治天皇の御治世は、日本が世界に立上つて、襲ひ奇る外壓を拂ひのけ拂ひのけつゝ、すばらしい向上發展をした時代であつて、今日の飛躍も亦、その時代に種蒔かれ、又、方向づけられたものである。將來は恐らく我が日本の思想と西洋の思想とが極東亞細亞の舞臺で白熱戰を演ずることとならうと思はれるが、どうすれば武力戰・産業戰の如く偉大なる成功を贏ち得るであらうか。優勝劣敗は天の理法であるから、優れてゐねば敗れる。故に我々は正しい自覺を以て、自らを強く優れたものにまで絶えず鍛へ上げなければならぬ。

回顧すれば、明治維新の當初は、お上を現人神と崇め奉る國民精神の結晶で出來てゐる。福井藩の如きは隨分あの當時去就に惱まれた事と思ふが、而も順逆を誤らなかつた。私が古老から聽いた話に依ると、伏見鳥羽の戰が初まつて恰も半ばに至つた頃に、勅使が戰場に出られると、其の前に掲揚された錦旗を一同目仰ぎ見た官賊兩軍は、共に皆打ち合ふ鐵砲を一齊に投げ出して、土下座して拜したといふことであるが、私は此の精神、此の氣魄が、事ある時には、皇國

日本の御民を水も漏らさぬ團結に置く根本動力であると思ふ。その後も此の原動精神が働いて絶えず國家を護持して來たのであるが、乃ち私は茲に其の後の事を凡そ十年づつに劃つて申上げて見たいと考へる。

明治十年代の我が國には、ミルの自由論、ルソンの平等觀が西洋から入つて來て、それが薩長藩閥政府に對する不平と結びつき、自由平等論は殆ど一世を風靡した觀がある。岐阜で板垣が兇漢の襲撃に會うて傷けられた際、板垣死すとも自由は死せずと叫んだのが、悲壯な感じを以て共鳴、宣傳されたのも其の頃である。私は其の頃松山にゐたが、運動會の小旗に自由平等と書いて得意然と持ち廻つた事をおぼえてゐる。正月に上げる風などにもやはり自由平等と紅白の二重文字に書かれてゐた。ところが次の明治二十年代になると、國粹保存の名で、日本精神が擡頭した。今日我々が國民道徳の大憲章として齊しく仰ぎ奉る教育勅語の煥發は、明治二十三年の秋であるが、それを契機として、國粹論は猛然として起り、外來思想の排撃が盛に行はれた。基督教も佛教も共に攻撃された。殊に明治二十七八年には國民精神を彌々昂揚せしめる戰爭も開始せられ、自由平等を論ずる者の如きは殆ど其の跡を絶つて、今まで翻譯物を讀んでゐた青年は、みな國文學に轉向した。然るに三十年代には又それが一變して外國思想が入つて來た。主としてそれはニイチエ張りのものであつて、自然主義、快樂主義が盛に唱へられ、人生の眞實を描くと稱して、専ら其の醜惡面の描寫に耽るものが輩出し、人生の幸福は飲めや歌への快樂にある、道徳も不愉快ではないが、到底それには及ばぬ、我々は快樂を追求すべく生れて來てゐるのに、道學者などは目ざはりである、引込めと云ふやうな説が、時代を風靡して、人心を廢頽せしめた。しかし明治三十七八年には國を擧げて戦ふ大戰爭が起つたので、國民精神は緊張し、外來思想との混戦状態で四十年代に移つた。

四十年代には劈頭に幸徳事件があつて、國民を憤激せしめたが、大正の御代になると、之を機縁に盛り上つた國民精神と、烈しく働かうとする外來思想とが纏れ合つてゐるうちに、世界大戦が起つて、西洋でも社會主義は雌伏状態となつた。ところが其の末期になつて、第三インターナショナルの顛覆的運動が猛烈な勢ひで擡頭し、最近に至るまで心ある者をして思想國難を憂へしめたのである。しかし其の刺戟が烈しければ烈しい程、又日本精神興隆の勢ひも烈しく、今日は日支事變の勃發等で、彌々緊張の度を進め、昭和十年以降の實狀では、日本精神の隆盛に壓されて、赤化思想は失脚の姿を示してゐるのである。

二

以上は念頭に思ひ浮ぶまゝに明治開國以來の思想推移を述べたのであるが、次には其の經過に徴して我々の國民性を振りかへつて見たいと思ふ。

概していへば、我が國一部の人々は外來の思想に對して批判が低級である、新しいものといへば、次から次へと移つてゆく。明治十年代、三十年代にも其の傾向が著しいが、その後にも屢々新しいものに致され、遂には第三インターナショナルに國の上下が蠱毒される状態を呈した。このやうに大した理由もなく外來思想に致されるかと思ふと又、何の理由もなく之を棄てる、まるで熱病患者の様で實にフラフラと浮かされる。これは確に我が國人の一部に見る缺點の面であるが、それにも關はらず今一方の面では、日本精神がその根を強く張つてゐるのが見られる。即ち皇政維新はいはずものこと、明治二十年代にも、日本精神は必要に應じて現れて、其の強い底力を以て自由平等思想を擊退し、その後

も亦、文運の進むに伴れて盛に侵入して來た外來思想を隱約の間に押さへつけ、最終には、世界革命を意圖して執拗に練り上げられたマルクス主義が、壓倒的な勢ひで侵襲して來た時にも、日本精神が現れて之を擊破し、立派に危機を防ぎ切つたのである。斯様にいつでも思想上の危機が到つたときには、必ず現れて之を強力に擊退するところに、我が日本精神の特性は存するのであつて、而もそれは實に根柢的な力を無限に包有してゐるのである。

一體斯の如き日本精神の實質正體は如何なるものであるかといふに、それはマルクス主義とか或は孔子の教の如く、理窟の上で練り上げられ纏められて體系づけられたものではない。故に之を形の上で握んで、これこれのものであると説明することは出来ない。乃ち日本國民性とは如何なるものであるかを外的に説くよりも、我々日本人は、思想批判の基準として如何なる尺度を持つべきかといふことを述べて、日本精神の素質的なものを明かにする方途を取るべきであらう。

### 三

私は司法官として直接判決には關係しなかつたが、併し思想問題については多少の體驗を持つてゐる。昭和七八年頃を中心として思想問題が汾湧した時代に當つて犯罪鎮壓の中心に立つてゐた。その當時、國民の輿論は、彼等に嚴罰を要求した。むしろ其れは殺戮的な勢ひであつて、議會などでも、司法當局の態度が生優し過ぎるといふので盛に質問が簇り出た。そしてすべてが司法省の責任であると見られた。しかし斯の種思想に對しては、宗教家や教育家の訓諭が無効であると同時に、嚴罰主義も必ずしも有効であるとはいへない。むしろ大正末期から約十年間に執られた嚴罰方策

は、却つて彼等の運動を激成する傾向さへあつた事に當局は苦い經驗を嘗めてゐるのである。それで之を如何に處理すべきかについては、勿論行政上の方策も考へられたが、私は思想問題を主として教化の問題として考へた。何となれば彼等は檢舉されても、法廷へ出ることに悔を感じないのであるから、何とかしてそれを衷心より改めさせる道を開かねばならぬと痛感したのである。實を言ふと、青年時代私が洋行した時の主要問題は、如何にすれば此の地上から犯罪を無からしめること、若くは減ずることが出来るかの刑事政策學を世界的に討究することにあつたが、幾許もなくして迷宮に入つた。それをいひ出すと色々また複雑な問題になるが、刑は報復でない、防遏のためであるといひ、また犯罪人を改善することは可能か、人の意志は決定的か宿命的かといふやうな問題について、社會主義者は犯罪を以て社會の罪である論じ、人類學者は遺傳素質を高調し、刑事政策はまだ十分に學として成立せず、確な目標もまだ出來てゐなかつたのである。しかし私としては其の甲論乙駁の間にあつて、ヒントを握み得たと感ずる點があり、或る程度までの確信を持つて戻つて來たが、自分は學者でも、操觚者でもないで、只仕事の上の考へだけに止つたのである。ところが後年我が國で思想問題が悪化して、所謂思想國難が叫ばれた際に至つて、私は何とかして彼等考へ誤つてゐる者等を教化して轉向させねばならぬと考へた。そこで色々各方面の人々と相談したが、教育家や社會事業家で其の事に當らうとする人はなかつた。併し何分にも必要な事であるから、私が自ら進んで大孝塾を設けた。勿論施設としては小さいものであるが、小さくとも、續々それに倣ふ人が出來れば、教化網をつくることが出來ようと信じて愈々仕事を開始したのである。此の塾の仕事に、一個の皆川が何の恃むところがあつて着手したのかといふと、一つには、若い人たちの心理を観察して人類の天性に觸れるといふ事もあつたが、今一つには我が國古來の國風たる敬神崇祖の行事が人性に及ぼす

感化を考へての事であつた。併しそれを公けに名のつて出る心はなく、たゞ靜に仕事を進めて効果を擧げればよいと考へてゐた。塾の仕事の一端をいふと、最初いろいろと人に勸めて見ても立上る人がない、ところが或る人に私の話を話すと、近頃の若い者は孝行を否定してゐる、斯ういふ者を教化するには只行である、信仰を基礎とした行の外はないといふ返答であつた。それで私は考へた。結局問題はそこにある、一體古來の道徳を否定する人間に忠孝の大本を覺らせるにはどうすればよいかと云ふに、彼等は素質としては確に日本人的なものを持つて生れて來てゐる、其處に現代の學問から一步踏み込んだ境がある、それを開發することが必要なのである。そこで愈々道場を始めると、毎日朝夕には必ず敬神崇祖の行事をやらせる事にしたが、これには赤化思想の者が反對で、例の宗教は阿片なり云々の説を持ち出した。そこで私としても、そんな説の何處に合理性があると思ふのか、君等が輕んじてゐる神祕的な信仰のある所にこそ未發見の合理性が存するのであると、合理的に説くことを餘儀なくされた。併し彼等は一旦合點すれば、眞劍に行ふ。そして自ら鍛へ直して行くうちにすばらしい日本人になる。普通の者よりも遙に優れたものになる可能性を持つてゐる。

そこで結局、彼等を其の様な行事に導き入れるために、どんな事を云つたかの一面を語る事が順序になつて來る。

#### 四

話は當然に其の未發見の境地の事を、哲學的・人間學的に語る事になるが、話を聽く者の素養を考へて、私は二三の小話を宿題として彼等に授ける。其の一つにお綱の話がある。

それは福井縣小濱に残つてゐる話であるが、一番便利であるから私は好んで其の話を撰ぶ。小學校の教科書にも出てゐるといふ事であるし又、有名な話であるから知つてゐる人も多い事と思ふが、書いてある本によつて多少話が違ふ。私が讀んだものに依ると、小濱の刀禰茂太夫といふ者が、角左衛門の娘である十四歳の少女を子守に雇うた。それが即ちお綱である。お綱十五の歳即ち明和元年の六月十一日に、當時二歳になる主人の子を負うて町に出ると、狂犬が飛出して來た、驚いて逃げたが、何分にも子供を負うてゐるから四足と競走は出來ないで忽ち飛びつかれた。と其の瞬間にお綱は主人の子を胸に庇うて我が身を狂犬に與へた。それで手足、頭部とお綱は食ひ散らされたが、何處までも我が身を當てがうて主人の子を守り了せた。漸く人々が大勢駆けよつて救うた時には、最早氣息も惴々焉としてゐたが、其の危篤の間にも只管主人の子の安否を氣づかうて、一ヶ所の傷もないと聞くと難有いと云つて死んだといふのである。此のお綱の話について先づ考へて戴きたいのは、お綱のした事は、身を捨てて仁をなすもので、所謂義は泰山よりも重しの意味が盛られてゐるが、東西古今の考へ能ふ道德、日本軍人の最高理想を、此の僅か十五の小娘が衝動的にやつたのは、どういふわけであるか。凡そ倫理道德は求むることを得ずして又容易に到達出来るものであるといふが、お綱はそれを地でやつてのけたのである。お綱は目に一丁字もないものであるから、勿論學問理論によつてした事でもなく、理想として現したのでもない。そこで、人間活動の原在力は何處にあるか、人を活動させるものは何かといふ事が、此のお綱の話から考へられるのである。

マクドガルドの著書にも、ゼームスの書いたものにも見られる事であるが、栗鼠を動物心理學上の實驗に供した話がある。栗鼠をパンで育てて三ヶ月すると、恰もお綱時代の年齢に達するが、その時初めて胡桃を與へると、初めは少し

考へてゐるが、次いでそれを管め試み、やがて急に嚙んで食ひ割つて、中から果肉を出し、其の上へ土をかける動作をして蓄へ、空腹の時にそれを出して食べるのである。此の動物試験について人々は色々の着眼をしてゐるが、コフカは土を掘つて蓄へるといふ處に、動物に於ける遺傳の固定性を是認してゐる。しかし私は全貌を見よといひたい。殊に胡桃を嚙み割つたといふ事は全くえらい。人間ならば必ずや自ら其の點に誇を持つて自分の新發見だと思ふであらうが、栗鼠として、さう云はれないのは、それは新發見ではなくて、其の通りの事をやはり親がやつたばかりか、何十代何百代以前の先祖も同じくやつた事の新發見であり、謂はゞ遺傳能力だからである。此の點は子孫として父祖に感謝せねばならぬ所で、人間としても深く考へなければならぬ點である。私としては前に述べたお綱の話と關聯させて考へて、お綱の行動は全くその遺傳能力の發現だと思ふのである。遺傳といふ事を外にしては、お綱の話も栗鼠の話も考へられない事である。

次には猫の心理學的動物試験の例である。猫の子を親から離して約六ヶ月経過すると恰度お綱の年に相當するが、その頃に鼠を眼前に放つと、曾て鼠を見た事もなく、又、その聲を聞いた經驗もないに關はらず、實に巧妙に捕獲する。もつとも其れにはチャンスもあり、方法もあるが、試験に供された八疋の猫は、何れも皆巧に捕鼠に成功してゐる。ところが、親から離して後一年に及んだ猫は、捕鼠に興味を持たなくなつたと報告されてゐるのである。これは實際の育て方を見ないのであるから、何とも斷定はしかねるが、私の懇意な家に飼はれてゐた猫は、やはり鼠を捕らなかつた。それは餘り可愛がり過ぎて、平常美食ばかりさせ、而も抱いてばかりゐたからである。ところがさういふ猫も、幼い時から、鞆を轉がして捕へさせるとか何とか、或る刺戟を與へて遺傳素質の啓發をすると、自然と鼠を捕るやうになる。



乃ち是等の點から考へると、栗鼠でも猫でも育ちが悪いと、即ち刺戟なく育つと、それが假令祖先以來幾千年の鍛練を経た遺傳であつても、雌伏するものであると共に、又その次代の者に刺戟を與へる事に依つて、遺傳素質を再發芽させ得るものであることが分るのである。これは教化修養上非常に重要な問題であると思ふ。

私は曾て旅順生れの非常に優秀な獵犬の子を貰つたことがあるが、これが天性として方々から色々の物を啣へて來る習性を持つてゐた。ところが或る時、家人が外へ使に出ると、それについて出て、而も通帳を啣へて先へ走つて行つたのが初めて、その後は單獨で立派に用を辨じて來る使ひ犬になつた。近所でも甚だ珍しがられたが、これは獵犬として適性を遺傳して生れて來たが、其の能力を活用する方途がないために、環境に支配せられて、轉じて使ひ犬となつたものである。

そこで此の組合せの關係を假に圖示すると、次の如くなる。

生命、直觀、活動

凡そ生命有るものは必ず活動する。ところが特に人間の場合には先づ直觀を取る。直觀は心理學的に言ふと直覺であるが、intuition といふのは、佳い景色を見て、あゝ佳いなアと感歎するのであるから、其處には熟察の面がある。impulse（衝動）に近いやうでもあるが、それとも稍違ふ。それに emotion（情緒）といふやうなものが加はつて醸し出される感じが即ち謂ふ所の直觀に當るのである。ところで其の直觀と活動との間にギャップがあれば、其處に意識が生じ理論が生ずるが、間隙が無ければ意識が生じない。感情はあるかも知れないが、理論は生じない。即ち本能的な行動となつて現れる。前に云つたお綱の場合はそれで、ギャップがない。狂犬だ、大變だ、といふ閃きはあつたらうが、ギャ

ブはない。無意識である。思慮判断を用ひる間もない咄嗟の直観行動である。

現代の教育は知識の世界であるが、それがどれ程實際の役に立つであらうかを私は疑ふ。酒を飲むことは衛生上有害であるから將來禁じようと理論的に決定しても、感情が又勢ひを得ればフラフラと飲んで了ふ。それが汎く世界的に見られる現代の教育の缺陷である。倫理學は人間最高の道德を教へるが、如何にして其の境地に達し得るかの方法を教示しないのが缺點である。學校では勿論色々講釋もし、また知行合一をも説くであらうが、知識だけでは役に立たぬ。斯様に凡て知識の世界のみに訴へる所に現代教育の缺點がある。勿論直観、直動で、萬事江戸ツ子式にたゞきつけるといふ事にも缺陷はあらうが、如何に聖人君子が最高理想を描いても、活動と直観との間にギョブがあれば、そこに意識が生じ、理論が生ずる。即ち理論だけで活動が爲されるといふところに缺陷が起る。故に一概に何れが善い悪いとは云はれないが、要するに、思想上・精神上正しい撰擇を行うて善き活動を爲さしめるためには、先づ直観の根柢を正しくすることが必要であつて、斯くして茲に一切を善化し美化する立派な仕事が出来るのである。故に直観の一點に力を入れねば駄目であると觀察される。私は此の力を、意識上の力と、その一步手前にある意識下の力とに分つて説明する。本能は學術語でないといふが、西洋人は本能が生命の力を扱ふに當つて、之を動物的に扱ふ生命の哲學も西洋人の手にかゝると動物的なものとされる。私はさういふ見方に賛成しない。

私が謂ふ意識下の力とは、subconsciousness 即ち潜在意識の意味であるが、此の點に臆げながら眼を著けてゐる人は少くない。例へばフムクト流の精神分析をやる人々の如きは幾分それに觸れて述べてゐるが、其の正體を見てゐない。またカントは先驗的の語を使つてゐるが、それは意識下の力が働いて初めて可能ならしめられるものである。ところが

進んで其處まで斧鉞を入れて正體を見極めた人は學界に殆どない。沉んや之を體驗した人に至つては其の存在が疑はれるのである。先づ此の意識下の力とは如何なるものかを臚げながら考へて頂きたい。これは萬人一樣のものでないから之をよく確める事が考へられねばならぬ。

そこで第一に考究する必要があるのは、人間の天性といふことである。此の天性が善か悪かについては、古く孟子と荀子との間で水掛論が行はれてゐるが、カントなども性惡論に與してゐる。その外、政治法律方面の學者は、人が利己心で動くことを前提として論じてゐる。中には、合理的自我は愛他的であるといふ人もあるが、概して西洋人は性惡と云きめてかゝつてゐるやうである。此の見地からすると、直觀は惡である、其れを捏ね廻して善くするのだといふが、私には天性を惡と云きめてかゝるのが誤つてゐると思ふ。何となればお綱がゐる。

私は人間の天性問題に關しては孟子に左袒する。人間を觀察するには心理的に分析するのみでは本當の事がわからぬ。森にゐる者木を見ずで、人間が人間自身ばかりを見詰めてゐたのでは眞實の姿がわからぬ。一切の生物の生活動向の歸趨と合せて人間を客觀することが必要である。ところが其の爲には生物學がある。生物學の見解に従へば、一切の生物には、種族保存性と個體保存性とがあつて、其の何れか一つを缺けば生物は絶滅するといふ。これは恐らく何人にも異存のないところであらう。樹木でも昆蟲でも其の身を保つためには、あらゆる努力をする。董・蒲公英なども、往來端に生えてゐるのは甚だ發育が劣つてゐるが、それでも皆花をつけてゐる。これは皆種の繁殖のためである。此の種の保存といふことは、禽獸蟲魚草木に至るまで、凡ての者が皆具有する天賦・天稟・天性であつて、人間の事も之を無視しては考へられない。私は之を土臺に置いて考へる。

ところで生物學上では、此の生物天賦の本性を、個體保存と種族保存との二つと觀るが、私はそれを二つではなく、一つであると考へる。これは新主張かも知れないが、つまり個體保存と種族保存とは別々のものでなく、互に相互作用する分身であつて、決して二つではない。そのみならず、一切の生物にあつては、個體保存性は種族保存性の前に生滅消長するのである。私の體験でいふと、抱卵中の母鶏は之を脅かしても容易に動かない。手を入れると痛を與へ、棒を入れると壊し、刀を入れると啄を斜に構へる。更に刀を背に當ても、又突倒しても動かない。なほ別の例でいふと、熊が馬に襲ひ寄つた場合、馬が乳呑子を伴れてゐると駈けて逃げないで、遂に捕へられる。それからこれは、關東大震災の時に聞いた悲惨な話であるが、當時産褥中にあつた一婦人は、天地が揺れ動く中に、猛火が迫り寄るのを見ると、氣も狂ひさうになつて、乳呑子を摺鉢で伏せ、我が身を其の上に置いたといふ事である。自分は焼け死んでもいゝから子供だけは助けたいといふ母心である。即ち種族保存の必要の前には母も死に、馬も死に、鶏も生を顧みないのであつて、つまり個體保存性の強い力が無力化し自滅するのである。これは私が前に個體保存性は種族保存性の前に生滅消長すると云つたことを實證するものであつて、斯くて個體は死ぬが、而も他の一方では新陳代謝的に新個體が成長して行くのであつて、種族としては無限に發達進化を續けるのが、一切の生物に通ずる天賦天稟である。

斯様に意識下に存在するものの力は、人間活動の終までをリードするのであつて、君臣・親子・夫婦・朋友の關係は、忠孝仁義禮智信等がそれを律するといふが、人間の正邪善惡眞偽美醜の價值判斷は經驗や知識のみでは與へられない。即ち學問のみでは教へられない。眞の惡、眞の醜といふのは、畢竟、個體保存性が種族保存性に逆行するものを指すのであつて、眞善美とは人間の行動の面が、種族保存性に適應した場合に湧いて出る直觀である。

私は會て洋行當時に犯罪絶滅の考へを抱いた事を述べたが、犯罪は種族保存性と順應しない點に於て惡であり醜であり、詐欺とか窃盜とかいふ事は個體保存性の發展である。人は自ら救ふためには何をしてもいゝといふのは個體保存の上にのみ即した誤つた考へであつて、種族保存を重んずる上から見れば、明かに罪である。ところが之と反對に佐倉宗五郎とか、戦場の勇士、又はお綱の如きは身を殺して仁をなしたものである。これは教へられてさうなつたのではなく意識下に充實したものが發して外界の活動に現れる事によつて、志士・仁人・聖人・君子の行ひとなつたものである。正邪善惡不可は時代によつて變遷するといふが、それは只形式の上の事であつて、内面的實質的なものは永久不變である。無窮の過去から無窮の未來へと發展するものであるから、質としては永久不變である。外形的なものは環境によつて變化するが、本質的なものは不變であつて、意識下に於て根本動力となつてゐる。

環境順應とはよく人の言ふ事であるが、*adaptability* 順應といふよりも私は寧ろ適應といひたい。環境適應に依る種族の保存は寧ろ發展性を含む。生物學上は保存であつても、それは創造進化發展である。此の環境適應に於て凡ての生物が種族保存性に統一されてゐることは、生物の一切に通ずる原則であるが、たゞ物によつて其の環境適應能力に著しい相違がある。植物ならば日の射す方へ枝を出して葉を擴げる能力しかないが、動物などは假令原生動物でもどうにか生存に適する處へ自分を持つてゆく。つまり高等な物ほどグングンと飛躍的に發達するのである。況して人間に至つては神通力を持つてゐるのではないかと思はれる程に高度の向上發展をしてゐる。即ち寒帯を暖くし、熱帯を涼くする方法まで取つてゐる。人間の人間たる處、換言すれば人類文化の特徴はこゝに存するのであるが、更に私は *morality* も其處にあると考へる。

人類の天性の問題は此の邊で止めるが、惡の根元が人類の自我慾にあり、それを抑制して向上發展せしめるものが種族保存性にありとすれば、人間としては其の種族保存性を發展させる刺戟の方法を取ることが必要である。

## 五

さて次には日本民族の特性といふ事について、今一應考へて貰ひたい。これは今更繰返すまでもない事のやうであるが、西洋人などが、往々之を觀念的に見るのは誤であつて、本當は性格として見るべきである。カイゼルは何でも皆自分の國の事物を以て世界一としたが、而も國民の性格に於ては日本が世界一であると推賞した。此の世界一と折紙をつけられた日本國民の性格は、正氣の歌にも爆彈三勇士にも現れてゐるが、大きく云へば戦場の勇士、小さくいへばお綱にも現れてゐると思ふ。どうして斯ういふ性格が日本人に出來てゐるのかと云ふと、それには肇國の制度を考へて欲しい。お上には皇室あり、氏がそれに屬して大氏から出た中氏を支配し、中氏は又、分家末家たる小氏を支配し、小氏は更に又氏子を支配するのが我が日本の種族的制度であつて、之を逆にいふと、小氏は氏子を率ゐて小氏に仕へ、中氏は小氏を率ゐて大氏に仕へ、大氏は、中氏・小氏・氏子等の總てを率ゐて上皇室に仕へ奉るのである。日本民族の性格として世界一に貴いのは實に此の氏の關係であつて、大きく之を總括的に見れば、全日本民族が一大血族團體である。私は彙に支配といふ言葉を用ひ、又、率ゐるといふ言葉を用ひたが、それは權力、統制を意味せず、又、力の作用を意味せず、親和力を以て立つ親子關係の無窮の發展であつて、支配といつては實は當らないのである。勿論 typical な血族團體は、不良少年が内部に出れば之を鎮撫するが、打てばとて愛の筈である。不逞の徒は征伐するが、さうした力で組

織されてゐるのでなく、親和力で組織されてゐる愛の結合體である。即ち其處に親子關係の無限化が存するのである。親子の關係は生命細胞の分裂であるから、子は正に親の一部分であつて、その相互の間には、切つても切れぬ絶對の愛情がある。こゝでも假に愛といふ言葉を用ひたが、殊に親が子の爲にする愛は、普通の愛とか仁とかの語では言ひ盡せないものであつて、それは殊更に犠牲とは意識せずに行ふ獻身的な愛である。例へば或る者が刑務所へ入ると、友人とか知己とかは、恐れて近づかないが、親は却つて愛を強める。これは世界的の事實である。是等の點から考へても、親は天の代表者であり、神の權化である。即ち親は神の力の現れであるから、我が日本では親を神の如く尊み、親の親たる祖先を神として崇敬する。そこに敬神崇祖の理法が存し、親子關係の無限の發展の中樞精神が存するのである。

我が皇國の歴史を見ると、大化から千三百七年の間歴史あつて以來の過半を通じて、日本人は親子關係の無窮化をやつてゐるが、その由來する所は實に悠久である。西洋では色々なシステムを以て法律を作るが、民族性に適しないと實效が擧がらない。支那などは随分外國法を翻譯して發布してゐるが、行はれない。これは民族の素質といふことを考へない誤りに基いてゐる。民族は悠久の過去を持つてゐる。そして其の組織は天地自然の理法の上に立つてゐる。凡そ人間のみならず一切の生物は、天地自然の大法によつて活動するが、その天地自然の大法は、種族の保存性を根本とする。それが無ければ、生物の一切は斷絶する外はないのである。故に昆蟲から魚、鳥の類に至るまで子育てに努力することは驚くべきもので、よく育たぬ者には一層の努力を加へて之を育てる。斯くして親子關係の無窮化によつて、進化發展するのが生物通用の大法なのである。

故に人間としても、血屬團體から發展して、血統に繋がる者等が互に扶けあひ、その存立・向上・發展を圖つて來た

ことは、凡ての民族に共通な世界的事實であるが、しかし多くの國ではそれが甚だ速かに崩壊してゐる。社會學者は之を世界的法則であると論じてゐるが、古代の西洋人等は、水草を追うて生活する遊牧時代が比較的長かつたので、一ヶ所に定住して生存を續けることが出來ず、従つて大きく團まることなく、次第に分裂の傾向を取つた。而も我が國のやうに分家といふ事がないから、一旦分裂して了ふと、相互の間の因縁の繋りがわからなくなる。そこで互に利害の衝突を來し、強食弱肉の世界を現出して、現代の權力國家の濫傷となると共に、一方では又、弱者が團體を結んで強者に對抗するに至つたのである。西洋では此の權力團體と自由主義的との軋りあふ状態を常法と見て、血族團體的な日本の立國を眼中に置かず、歴史家も之を是認しないが、その見方が誤つてゐることはいふまでもない所である。支那の文字が日本へ來る前の事實を書いたものに、魏志の倭人傳があるが、それには日本に於ける相續の本來性を記して、其の序君臣の如しと書き、正直勤勉の性あることを記し、また「婦人淫セズ妬忌セズ」とも書いてゐる。殊に日本の國俗として本家分家の關係が君臣の關係の如くであるとしてゐる點は、大に注目し値するであらう。

## 六

只こゝで問題となるのは、さうした東洋的な貴い道徳を日本人のみが維持し得たのは何故かと云ふ事であるが、それは敬神崇祖の力である。即ち家族は其の家長と共に氏祖を祭り、小氏族は氏系を同じうする氏子と共に其祖先を祭り、大氏族は中氏族・小氏族と共に共同の祖先を祭り、究極に於て、畏くも皇室に於かせられては、國民と共に皇祖皇宗の大神をお祭りあそばされる。これは抑も國初以來、今に至つて變じないところで、これを本として日本の歴史は存し、



君臣の關係は存し、民族の共同生活が存し、そしてそこに皇國無窮無限の昌運が存するのである。天壤無窮の神勅も、單に言辭の上のみで拜すべきではなく、意識下の力が働いて、それが現實の國家生活に活かされてゆく所に、尊い無窮性が活き活きと感ぜられるのである。

斯かる組織で練り上げられて來てゐるから日本人は皆共同の祖先から出た子孫である。即ち此の意味に於て全日本人は、常に無窮から無窮へと進む一體であつて、我は日本人として無窮無限の實在なりと信する處に、祖孫一體の觀念が湧いて出る。意識せざる意識が意識下に充實する。これは明かに種族保存性の意識、個體超越の意識であつて、實にすばらしい親心の本である。即ちこれが發しては身を捨て、義を取る献身的の精神となり、海ゆかばの歌となり、お綱となるのである。此の意識は意識下に充實してゐるもので、意識の面には現れて來ないが、それが一如の生命となつて、眞劍に立向ふから、何者も敵することを得ないのである。

支那から儒教が輸入され、また半島を経て佛敎も來たが、我が國には祖孫一體の觀念が根柢をなしてゐるから、外來の思想を決して其のまゝには受取らなかつた。例へば禪讓放伐の如き思想は許さなかつた。佛敎でも四苦の解脱とか、寂滅爲樂とかの思想は個體本位のもの、輪廻轉生は厭世觀を伴ふものであるから、これ亦取入れなかつた。日本人としては何處までも種族保存のために個體を捧げるのが民族精神であつて、それで孫子まで行くのが本分である。つまり生命の底から繰り上げて子孫に無窮に發展させるところに超個體的の崇高なる精神があり、無窮の生命への歸一があり、西洋人とは大に異なる日本人の特色が存するのであつて、自己の利益を第一義とする西洋人とは相反的である。

此の日本人の精神的特色は、戰場へ出ると、一層強烈に現れる。日露戰役の沙河戰では、日本軍が完全に側背を突か

れてゐる。これが西洋人ならば、當然勝負はなかつたのであるが、しかし進むあるを知つて退くことを知らぬ我が皇軍は、若しここで敗れたならば祖國を如何にせんといふので、決死的突破を幾回も試みた末に、到頭優勢陣地を占め、普通ならば負ける筈の軍が勝つて砲何十門、捕虜幾萬を捕獲し、遂に敵の計畫を完全に挫敗せしめた。「日本人の精神力だけは計畫に入れなかつた」とクロバトキンは書いてゐるが、我が軍でも「あの時は兵隊が勝つたのである」と幕僚が述べてゐる。つまり日本人の傳統的な血の中に漲る力が勝つたのである。大化以後唐制を採入れてから幾許かの動搖變遷はあつたが、しかし根本の精神は一貫的であつて、同じ戰國時代でも、日本のそれは外國のものとは異なつてゐる。

明治維新の大事業も、畢竟それが發して成果を示したのであつて、西洋では民政復古であるが、日本では斷然皇政復古である。そして今も日本人の意識下には、親子心が充實してゐるから工場にも親子心が充實してゐる。産業上日本の發展が著しいのもそれが爲である。此の意識下の力は、お綱の場合と同じもので、決して體系づけられた理論で育て上げられたのではなく、遠い過去から鍛へ貫かれ、血潮の中へ潜在的に、遺傳された能力であるから、刺戟的になる。そして其れは身を舍て義を取る行動となつて現れるのが日本民族の性格である。性格であるから、それは必要な時に精神・氣魄となつて現れるが、殊更に猝に捕へて體系づけられたものではない。結局我々は敬神崇祖の精神を根本に、鍛へられて、直觀直動するお綱である。だから意識は持ち合さない。そこで次には、此の意識下の力を如何にすれば充實することが出来るかゞ問題となつて来る。

何としても現代の社會には、個體保存性の刺戟が餘りに多い。Renaissance 以來、人々は個人の解放を叫んで、所謂自由平等へと驀直に進んだ。あの時分は環境に對する刺戟が甚だ強かつた。人々は其の收入の十分の四・八を國庫に納

めねばならない外に、一・八は大名に、一・八は又、寺院に納めしめられたのであるから、農民の手に残るのは僅に十分の一・六に過ぎなかつた。而も其の苦しみに堪へて、農民たちは生活の平安を保持したがいのために、納税を續けたが、それでは自分たちの生命を繋いでゆくことは出来ないもので、職業を轉換せんとしても許されず、窮狀に縛りつけられたまゝ搾取し續けられた。そこでルツソーが奮然と立つて、自然に復れの叫びをあげると、期せずして皆一時に之に共鳴したのは當然の事で、その結果は佛蘭西革命となり、帝王までも血祭にあげ、自由平等を偶像化して、解放への激流的な動きを見せた。その間、思想家も出たが、一つとして皆時世の波の影響を受けないものはなく、凡てが個體壓迫からの解放の必要に迫られて、その發展のために立てられた學問であるから、生物の本性には適しない。そこで惟神の道に即する無限擴大の潜在意識とは一致しない。理論の上では個體保存のための要求に打ち負けても、敢然として撥ねつける、理窟なしに撥ね反すのである。

しかし斯様に意識下の力は強いものであるに關はらず其の正體は不判明で、只内在的に練り上げられ、實質的に鍛へられてゐるのである。之を覺醒して、意識下の力を更に充實すると共に、意識上に持つて來て、無窮の生命への發展を基礎とした思想文化を建設することが、所謂日滿支中心の新東亞建設、西洋文化の没落を救済する新時代の建設であつて、我々の任務は其處にあると云はねばならぬ。

七

次にそれでは、其の意識下の力を覺醒するには、どうすればいゝのかと云ふに、私はエミール・クーエの事を讀んだ

時に感じた、それは藥學博士であるが、或る時、藥を買ひに來たものがあつて、或る瓶を指し、それを呉れと云つた、見ると明かに變質してゐる、それで、こんなものは利かかないと云つたが、イヤ確に利くからと云つて持つて行つた、そして一週間ほどすると、お蔭で治りましたからと謝禮に來た、博士の方では狐につまゝれたやうな感じであつたが、それが初めて、續々その藥を求めに來る者が殺到し、所謂の門前市をなす盛觀を呈した、しかし博士自身の藥學知識からすると、到底利く筈はないのであるから、斷然供給を停止し門を閉ぢて考へ込んだ、といふのである。クレーの事は、大正十三、四年頃にパリで大變な評判であつたもので、當時の新聞や雜誌には、それがセンセイショナルな筆致で書いてあるのを見た。

事實どうであつたかを私は知らないが、それ等のものに書いてあつた所に據ると、彼は命令で病氣を治した、ロイマチス患者が來ると、「もう治つた、歩け」と命令する、すると其の命令と共にロイマチスは拭ひ取つたやうに治癒した、といふのである。それで非常に流行して、各地で講演した記録が諸國の言葉で書き残されてゐる。私は英語のも佛語のも見た。相當長いものであるが、結論だけをいふと、或る人が自分の所へ尋ねて來て、あなたの講演を聽きに來られる者には限があるから、其の原理を書物に記して廣く發表されてはどうかと云はれたが、それは造作のない事である、世間の母親の家庭教育を見ると、多くは子供を偉大にしようとして馬鹿者を作つてゐる、何事でも駄目だと云つてゐると皆駄目になると云つた、意識下の覺醒は其の間にある、生命の力をベルグソンなども、意識、理性で把握しようとするからいけない、潜在意識、意識下の意識はサブマリンのやうなもので、意識でないかも知れぬが、自分で自分の意識下の力を覺醒するには如何にすればいいのかと云ふと、之に對してクレーは一日の仕事を終つて眠に落ちる境目、意志も感

情もトロンコになつた時が、潜在意識を覺醒するのに最も適當な時であるから、その時に意識を集中し、念力を集中するがよい、そして今晚は段々よくなる、と物の二十回も反復し、また朝起きる時も、思想感情のトロンコの時に繰返すがよい、と云ふのである。

更にクーエの後に、ブルースも之に似た事を宣傳した。即ちブルースに依ると、人の居ない室内を歩きながら、今日は屹度自分の志を遂げるぞ、必ずやつてのけるぞと、反復すれば、大抵の仕事は成功するといふのである。

私は此の人たちの原理と仕事とを讀んでゐる間に、髣髴として念頭に浮かんで來たのは、我々の祖先が行うた敬神崇祖の諸行事、例へば禊祓とか、その他の神前の行である。そして兩方を思ひ比べて見て、これは我々日本人の方が確に徹底してゐる。生命の根本を動かす力を我々の祖先は持つてゐたのである。山嶽地帯へ行くと、峻嶒な巨岩怪石の上などにお宮が建てられてあるのをよく見受けるが、日本人は一念を凝らして、その様な危い所へまで行つて參詣するのである。そして其れが生命を鍛へて強くするのである。これは重荷を負はせて置けば、却つて對應性の發揮となり、能力の發揮となつて、延びるだけ延びるのと同理であつて、一念を凝らして進めば種々の關係で徹底的な行き方になる。室内で動物園の虎を真似るよりは優れたやり方である。そして拜殿に參籠して一二週間飲まず食はず端坐して念力を凝らす事はまた、寢床の中で思念するよりも遙にいい。中には、唱へ言をする者もあるが、これもクーエよりは徹底してゐる。斯くして靜心端座し思念を凝らして恍惚境に入ると、第一自我、第二自我が疲れと共に落ちて、その際幻覺、錯覺を通り越し、そのドン底には久遠に生き貫く生命の力のエッセンシアスなものが、突つかへ棒として残るのである。つまり内我 *innerself* だけの世界になるのである。此の心境に達すると、何を考へても、また何を判斷しても徹底する。

日本人は神的なものを持つてゐるが、私の神は個體性によつてカバーされてゐる。ところが褻被をして、清らかに  
つて、神前に靜心端座してゐると、内我が出る。そして其の内我が、坐前に仰ぎ奉る貴き神と歸一するのである。實例  
でいふと、和氣清麻呂がそれである。あの當時は、支那學が日本を風靡して、理論的に崇められてゐたので、禪讓が天  
下を治める理法であるとする思想が入り、道鏡に讓らせらるべきやといふやうな説が出て來ると、意識の面ではそれを  
肯定する側の誤つた判斷も起つた。併し直觀の根柢となつてゐるものは、直ぐそれを撥ねつける。そして遂にあの堂々  
たる神宣の復命となつて現れてゐるのである。個體保存を中心とした考へからはどうか知らぬが、日本人本然の無窮の  
發展性から言へば、清麻呂の言動は實に合理的な態度であつたと云はねばならぬ。意識面では抵抗に惱むが、直觀が道  
鏡の非望を許さない。そこで宇佐八幡へ神託を承りにゆく。一七日の間神前に參籠して靜室端座し、一心を凝らしてゐ  
ると、慾得がなくなる。そして此の場合、如何に定むべきやについて神の御意を承らうとすると、その時、心の奥の  
奥のエッセンスなものが神と歸一して、

「我國家開闢以來、君臣定矣。以<sub>レ</sub>臣爲<sub>レ</sub>君未<sub>レ</sub>之有也。天之日嗣必立<sub>レ</sub>皇緒。無道之人、宜<sub>レ</sub>早掃除」

との大神の託宣となり、毅然としてその神教を復奏して道鏡の意に忤ひ、左遷の運命に會うても悔いないのである。  
死んでも、呼吸は止まつても、生命細胞は生きてゐる。人間性として最も大切なものは、疲れ切つても殘存するとい  
ふ。其の根本生命の力で練り上げたものは、大きな働きを無窮にするのである。殊に敬神崇祖の心から發した神前の凝  
念は、實にすばらしいもので、今後にも我が日本の發展の原力を成すものである。褻なども實に尊い練行であつて、嚴  
冬の身を切るやうな寒さの中に、巖頭に立つて水に入らうとする時には、口も齒も喰ひ緊り、目もすわつて、五臟六腑

の悉くが難關突破の姿勢になる。乃ち其處に思ひそめぬ智慧も底力も、湧き起つて來るのであつて、心身にシツカリした準備が出來て、張りきつてゐるから風邪も引かない。其處にまた難關突破の快感が存するのである。智慧の面から觀れば、よしや其れが無意識であつても、禊の行事は之を繰返してゐると、自然と剛健な精神になつて來る。氣弱い事を言つてゐれば、段々だらけた精神になつて、物の役に立たなくなるばかりである。

單に禊ばかりでなく、日本固有の行き方は皆徹底してゐる。生命の本来に従つて、意識下に覺醒して物事に向へば、何事も成らぬものはない。併し自我本位ではない。個體保存性から超出して、種族保存性を覺醒されると、實にすばらしいコースを取る。孟母三遷の教はそれである。あの教にはレクチュアがない、従つて知識面がないが、併し正しい方向へコースを取つて行つてゐるから、孟子は其の面で母の教を把握して大聖人となつたのである。要するに正しい教とは、ライフの活動の方向に方向舵を與へることである。枠に嵌めて其の方面へ凡てを捻ぢ向けようとするやうな知識では本ものにならぬ。敬神崇祖といふ事も、凝念して意識下の力を覺醒しての敬神崇祖でなければ、祖孫一體觀は出て來ない。それが出て來ねば、従つて又、超個體性は出て來ない。故に我々は敬神崇祖の根本を再認識して、それによつて意識への文化を新に建設すべきであり、個我中心の學問を根本から立て直して、無窮の生命を根本としたものとするべきである。

要するに日本人の特性として、又、根本的なものとして將來に築き上げる道は、敬神崇祖の再發揮にある。これは我が國最古の國風であると共に、又、世界最新の修養道たるべきものである。